大学院ゼミの談話における視線の向け

授業名　予備調査
所属・学年　学籍番号　S05（漢字表記）

1 はじめに

この論文の目的は、大学院ゼミの談話における、外国人留学生の発表者による視線の向け方とその効果について、それを談話の進行状況に関連つけることで明らかにすることである。

日本は、言葉の使い分けが極端的に顕著な社会である。留学生にとっては、この現象が慣れにくく、日常生活に於いては日本人とよく交流できても、ゼミに於いてではなかなか空気が読めず、意見を上手く言えないこともある。よって、外国人留学生に対しては、汎用を目的とした日本語教育だけを行うのではなく、特殊な場面でも使えることを目的とした日本語教育を行うべきである。特に、ゼミという、外国人留学生の勉強にとって極めて重要な場面で能力を発揮できるように、この場面に特化した日本語教育を行うべきである。

以上論述したような教育を実現させるために、留学生が参加するゼミにおける談話を分析することが必要である。

この論文は、日本のゼミにおける外国人留学生の発表者に着目する。発表者は、ゼミ内では重要な役割を果たしている（具体的には次の小説で説明する）。ゼミの進行は、ただの発話や会話だけではなく、言葉が正しく作用するように、音声以外のスキル――ジェスチャー、視線配布など――も用いられる。それらのスキルの一つである視線配布を、発表者がどのように利用し、セミを順調に進めたかを、実際の該当する会話を分析することによって、解明することを目的とする視線配布の効果については、聞き手に自分の意図をわかってもらう効果があると仮定する

この論文に於いては、発話と視線をテーマとした先行研究に踏まえ、分析を行う。後続研究としては、同場面における聞き手が発表者の視線配布に対する反応についての分析が行われることが望ましい。

2 先行研究と本研究の位置づけ

発表における、発表者の向け方について扱った研究は、（大学名）大学院／（研究所名）研究所に所属の坊農氏と片桐氏による「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点――ジェスチャー・視線・発話の協調」（『社会言語科学』第 7 巻第 2 号、3－13 ページ、2005 年 3 月）や（大学名）大学（研究科名）研究科／（専攻名）専攻・（学部名）学部・（学科名）学科に所属する二本氏、林氏、中野氏による「協調学習における非言語行動分析に基づく参加者役割の推定」（情報処理学会第 76 回全国大会　第 4 巻 227－228 ページ、2014 年）、（大学名）大学（学部名）学部（学科名）学科に所属する小倉氏、長谷川氏、佐久田

氏による「一対多会話における複数人同時注意喚起行動の調査」（情報処理学会第 76 回全国大会　第 4 巻 263－264 ページ、2014 年）などがある。

坊農氏と片桐氏は、ポスター発表における、発表者のジェスチャー・視線配布・発話の協調に対して、発表者が所持する視点関連つけながら定量分析を行い、3 つの事実を明らかにした「1、対象を示すジェスチャーは、視線配布によって注意が向けられたのち表される。2、発話終了前に、話し手は聞き手へ視線配布する。3、聞き手への視線配布は聞き手の応答を促す」（農坊・片桐　ページ 11）。視線配布の作用に関する結論は以下の通り「対象（ジェスチャー）への視線配布は、表現主体（発表者）が対象に志向していることを聞き手に示すことに役立つ」、「聞き手への視線配布は聞き手の応答を促すということ」。以上 2 種類の視線遣いは、発表者が一方的に発話を続けるポスター発表においてよく見られるが、ゼミで行われる、会話が混じる発表に於いてもよく見られる。

二本氏、林氏と中野氏は、協調学習（ゼミと同意）における、グループの中心人物、リーダに追従する人物と、理解が不十分な参加者に気を配る人物などの役割を演じるメンバーを、記述、視線遣いだといった非言語行動を分析することで推定する試みを行った。問題に関す事前知識を持つ学生 2 名と知識を持たない 1 名からなるグループにおける非言語行動に対して定量的な分析が行われ、以下の結論が導き出された「発言や、視線を他者とまじわす頻度が高い参加者を含むグループは、グループ特性が会話中心となる」、「グループで中心的役割を担う参加者の個人特性が、グループ特性として現れやすい傾向がある」（二本・林・中野）。ここから、会話が活発に行われる協調学習に於いては、視線のまじわりが多いという特徴がある、あるいは、視線のまじわりが協調学習における会話を活発にするということが言えるのではないか。

小倉氏、長谷川氏と佐久田氏は、公共施設で不特定多数の聞き手に対して行う説明における、発表者の注意喚起行動に対して、物理的な分析を行った。「分析の結果、眼球運動、頭部運動、ジェスチャー、姿勢を使用する際に、眼球運動が先行し、後に頭部動作、ジェスチャー、による指示、重心の移動が起こることが分かった」（小倉・長谷川・佐久田）。つまり、眼球運動・視線の動きには、ほかの非言語行動より先行する特性がある。この特性は、視線運動・視線の動きに対する研究の重要性を示している。

以上 3 つの先行研究の結論をまとめると、視線配布は先行する非言語行動であって、ゼミのような協調学習においては会話を推進する大事な役割を演じている。また、グループリーダーに当たる発表者がグループの特性に大きく影響していることから、発表者の視線配布がゼミの進行方式に大きく影響していることは明らかになる。ところが、これらの研究は、いずれも日本語母語話者を実験対象にしている。以上の結論に踏まえて、これからは、ゼミに於ける、外国人留学生の発表者の視線配布について研究を行う。

3 研究材料と分析の方法

研究の材料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話を文字化したものである。発表者 A は、外国語学習における絵本多読の可能性について発表した。発表者 B は、日本語勉強者が日本語でレポートを書く時に合った問題について調査した結果を発表した。

２人の発表者の視線配布を観察し、それを

1. 発表者よる発話のどの段階に起こったか
2. 時間の長さ

という 2 つの基準に基づいて分類、統計する。

1.については、3 つの段階に分ける：「冒頭」、「最中」と「終わり」（直前）。2. については、2 秒以内か、3 秒以上かに分ける。1. と 2. を 2 本の軸にして、合計 6 つの座標に、それぞれ当たる視線配布を計数する。

4. 分析の結果

以上の原則に基づいて統計した結果を以下の図表で表す

発表者 A：（タンのチェンジ:4 回）

段階	長さ	冒頭	最中	終わり
	2 秒以内	3	55	2
	3 秒以上	0	9	4

発表者 B：（タンのチェンジ:9 回）

段階	長さ	冒頭	最中	終わり
	2 秒以内	7	67	4
	3 秒以上	0	2	8

以上の表からいくつか読み取れることがある

1、２人の発表者による視線配布は、長さが２秒以内の場合が極めて多い。

2、発話が終わるたびに、長い時間の視線配布が見られる。（12/13）

1.1 考察

1、短い時間の視線配布は、覗きのように、聞き手に気付かれにくく、情報を伝えない。長い時間の視線配布は、多くの場合、周りへの視線配布になり、聞き手の注意を引き付ける効果があって、情報が伝わると思われる。

2、発表が終わりに近い時、発表者は既に発表の内容の整理を終わらせたから、周囲への視

線を配る余裕ができたと考えられる。坊農氏と片桐氏による先行研究の結論「発話終了前に、話し手は聞き手へ視線配布する・聞き手への視線配布は聞き手の応答を促す」（農坊・片桐　ページ 11）に結び付けて考えれば、聞き手の応答を促すのは、3 秒間以上の視線配布だという結論に導く。

参考文献

坊農真弓・片桐恭弘、2005 年 3 月「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点――ジェスチャー・視線・発話の協調」『社会言語科学』第 7 巻第 2 号、3－13 ページ
二本柳咲子・林祐樹・中有紀子、2014 年「協調学習における非言語行動分析に基づく参加者役割の推定」情報処理学会第 76 回全国大会　第 4 巻 227－228 ページ
小倉広大、長谷川大、佐久田博司、2014 年「一対多会話における複数人同時注意喚起行動の調査」情報処理学会第 76 回全国大会　第 4 巻 263－264 ページ